

教材・教具の紹介

打ち合わせて音を出す楽器「むち」の自作と活用

齋藤 一 雄*

1 楽器「むち」

鞭(むち)は、競馬等で馬体の一部を棒やひも状のもので打ち付けものである。その「むち音を模倣するための楽器」(網代・岡田, 1981)として、ラヴェルやブリテン、マーラー、ショスタコービチ、芥川などの作曲家がピアノ協奏曲や管弦楽曲、交響曲、ドラマのテーマ曲などで使用している。

打楽器「むち」は、「板や皮などを用いて擬音用に作られたもの」で“slapstick”“Holzklapper”“frusta”とも呼ばれている(網代・岡田, 1981)。また、「しなやかな1本の棒または、細い小枝を束にしたもの」もあり、「ドイツ系の楽曲でよく使われる」(網代・岡田, 1981)。

東京都交響楽団がマーラー作曲交響曲第6番を演奏したときには、長さ約90cm、幅約12cmの板を打ち合わせていた。一般的には、2枚の細長い木板の一方を蝶番でつなぎ、2枚の板を打ち合わせるものが多く使われている。市販のslapstickは、長さ60cm、幅5.5cmの板を用い、蝶番をつけた下部に手持ち用の持ち手を付けているが、演奏する曲に合わせて、自作していることが考えられる。

ラヴェル作曲ピアノ協奏曲の第1楽章の最初の音は、鞭で始まる(楽譜にはfrustaと表記されている)。芥川也寸志作曲「赤穂浪士」のテーマ曲では、等間隔で鞭が打ち鳴らされる。

演奏方法としては、片手で1枚ずつ板を持ち、演奏する部分でタイミングをはかり、打ち合わせるだけでよい。わかりやすくシンプルな奏法である。そこで、ショスタコービチ作曲交響曲第7番「レニングラード」の第1楽章の中間部分を取り出して、特別支援学校(知的障害)の高等部で合奏をするときに、この鞭を自作して使用した。1m近くの楽器を両手で持ち、特徴のあるリズムに合わせて「パンパン」と2回打ち合わせる部分を担当することにした。

2 楽器「むち」の概要

1) 材料

厚さ1.2cm長さ90cm、幅6cmにカットされた檜材を5枚を使用した。それに、幅5cmの蝶番を2つ、木ねじを8本調達した。木ねじは、板の厚さに合わせて1.2cmのところでもカットした(図1)。

2) 製作のポイント

- 蝶番でつなぎ合わせるために、板のはじめに蝶番の金具の厚さのみだけのみで削り、蝶番を取り付ける。木ねじは、1.2cm以上あると、板を突き抜けてしまうので、ペンチなどでカットしておく。
- 手で持つ部分については、1枚の檜材から長さ22cmの板を4枚切り取り、手で持つ部分12cm×3cmをくり抜く。そして、角の部分をかんなでまるく削り、さらに、やすりをかけておく。持った手触りを確かめておく。
- 市販のslapstickは下部に持ち手を取り付けているが、実は持ち手の取り付け位置によって音響が異なる。下部に取り付けると、板がしなまってまさにむちのような音がする。しかし、今回は中央部分に取っ手を取り付けた。響きすぎないようにということと生徒が持ちやすいようにという理由である。接着剤と木ねじによってしっかり止める。事前に錐で穴を開けておくと作業しやすい。
- 全面にやすりを掛け、塗料を塗り、きれいに仕上げることもポイントである。
- できあがったものには、ひもや輪ゴム等で開かないように止めておく。

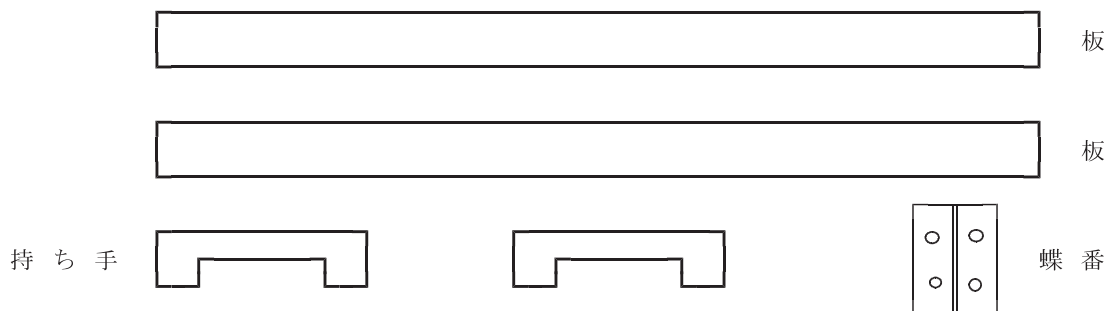


図1 「むち」の部品

* 上越教育大学大学院学校教育研究科



写真1 持ち手の部分

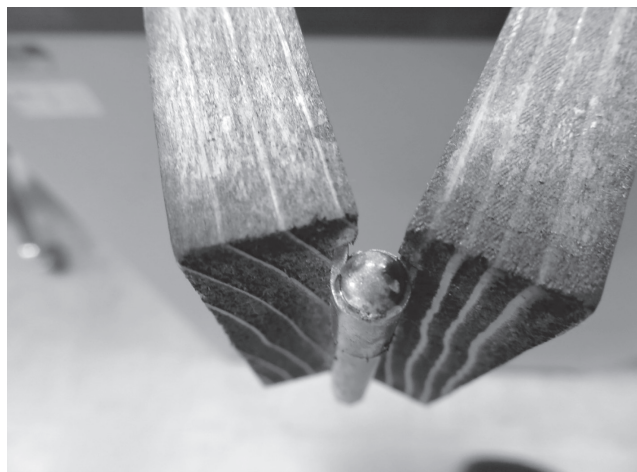


写真2 蝶番の部分

3 指導上の留意点

- 「むち」は、2枚の板を勢いよく合わせるとよい音ができる。
- 音を出すタイミングを計って、2枚の板を開き、バシッと板を打ち合わせる必要がある。
- 背筋を伸ばし、肩幅と同じぐらいに両足を広げ、よい姿勢で立ち、両腕の肘を脇につけ、両手で「むち」の持ち手を持ち、準備の態勢を作っておくことが重要である。

4 活用例

特別支援学校（知的障害）高等部全員で学習発表会で別支援学校（知的障害）高等部全員で学習発表会で合奏を行ったときに用いた（齋藤、1992）。対象の生徒は、日常生活に援助が必要な生徒5名、自閉的な傾向やコミュニケーションに課題のある生徒7名、その他16名、高等部1～3年生28名である。目標は、「全員で合奏を作り上げ、満足感を味わう」「役割を遂行する力をつける」「音と気持ちを合わせて合奏する力をつける」とした。

合奏曲は、ショスタコービチ作曲交響曲第7番ハ長調「レニングラード」の第1楽章の展開部で小太鼓のリズムの上に、いくつかの旋律とリズムが繰り返され、次第に盛り上がっていく部分を題材とした。そして、合奏の基本となるリズムパターンや旋律を取り出し、各楽器に割り当て、小グループごとに楽器と役割を分担し、練習しては全体で合わせていく計画にした。

授業の進行は係の生徒が行い、目標の確認を行い、小グループで楽器の準備と練習、その後、全体練習、そして、目標に添ったふり返りを行うという展開で、12月～2月にかけて実践した。

編曲や使用楽器は教師が行い、生徒の生活年齢や実態、欲求にあったものとし、無理のない楽しい合奏になるように考えた。また、生徒ができる場所は生徒自身で演奏できるように、その部分を明確にし、教師も役割を分担しながらも、最後には教師は合奏からぬけるように考えた。

決まったリズムで楽器を演奏することがむずかしい生徒には、フレーズの頭打ちやフレーズの中で分かりやすく特徴的なリズム打ち、フレーズの最後にツリーチャイムを鳴らすなど、生徒ができそうな場面を設定した。

その一つとして、発語がなく、やや多動で、着替えなどの細かい活動では支援が必要な、そして、リズムパターンに合わせて楽器演奏のむずかしかった生徒Aのために、自作の「むち」を使用した。両手で大きな楽器を持つことによって、合奏のなかでも注目される存在となり、多動の傾向が少なくなって、合奏に集中することができるのではないかと考えたためである。

生徒Aが担当した部分は、フレーズの中で分かりやすく特徴的なリズムを「むち」で「パンパン」と2回打ち合わせるものである。生徒Aは、楽器「むち」にも興味を持ち、うれしそうに「むち」をもってたっていて、動き回るのはほとんどなかった。

練習の過程では、打ち合わせるリズムの部分指揮棒で指示しても、遅れてたたき合わせることが多かった。何回か、支援する先生が持ち手を一緒にもって、リズムに合わせることも行った。ときどき合わせることができるようになり、学習発表会の本番では、1回だけであったがぴったり合わせることができ、ニコニコしていた。

他の生徒もやってみたくなり、休み時間等では、自分から手にとって打ち合わせてみる生徒もいた。

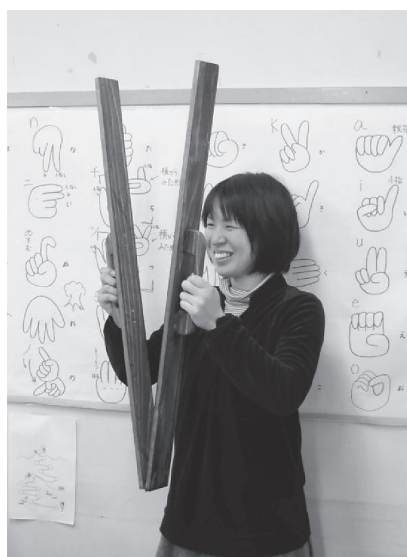


写真3 むちの使い方

小太鼓
リコーダー・鍵ハモ・木琴
鉄琴・鍵ハモ
むち
太鼓
ツリーチャイム

楽譜 合奏のパート譜

文献

網代景介・岡田知之(1981) 打楽器事典. 音楽之友社, 253-254.
齋藤一雄 (1992) 精神薄弱養護学校における合奏指導の計画と

意義 - 高等部合同合奏「ちちんぷいぷい」(ショスタコービ
チ/交響曲第7番「レニングラード」第1楽章より) の実践
- . 特殊教育学研究, 30(3), 21-26.